36　国立市谷保・本田家の馬医資料と医薬資料について

岩間眞知子
茶の湯文化学会

国立市谷保にある本田家は，今日まで医学関係の書籍約245点のほか，馬医絵巻などの馬医資料，医家としての記録，丹波元堅の書など多数の文書類を所蔵する．また甲州街道に沿いに残る本田家住宅主屋からは享保16年（1731年）の祈祷札が発見され，往時の建築と考えられている．この主屋と表門の「薬医門」は国登録有形文化財建造物に登録されている．そうした本田家資料は国立市で目録や翻刻資料として紹介され，帝京大学教授・菅野典子氏も『江戸の村医者―本田覚庵・定年父子の日記にみる―』（新日本出版社　2003年）として発表されたが，なお現在も国立市の調査は継続し，未発表のものも多いためここに紹介したい．

本田家の遠祖は鎌倉時代の武将・畠山重忠の郎党・本田近経といわれ，始祖は本田太郎二郎定経である．定経は馬の調教と獣医を家業とし，天正年間に没したという．その子孫が17世紀前半の寛永年間に川越から国立の谷保に移り住み，以来，今日まで谷保の名家である．

四代目定之の時に，徳川将軍・家光と家綱に「御厩方」として仕えたという．本田家の家紋「立ち葵」は，徳川家譜代本田家に家綱より下賜されたと伝えられる．また葵の紋付きの江戸根来塗の鞍を今に存し，延宝9年（1681）銘のあることから，将軍・綱吉から拝領したと考えられている．そのほか，建久3年（1192）や天正9年（1581）の年記のある馬医資料なども残っている．

その後，馬から人の医者に代わったのは何時のころであるのか明確ではないが，九代目・定綏（随庵1761～1834）からは確実に人間相手の医者であった．随庵は最上徳内・杉田玄白らとも交際し，息子・定价を市川米庵の門人としている．そして随庵よりは代々，村医者として，名主・年寄としても村政に携わった．

十代目・定价（昂斎）は「中風」「脚気」などの病気・症状ごとの治療法や薬剤の製法を記した「医方類編」，医家としての活動記録「配剤録」（文政3年～天保3年）を残し，書家としても知られた．11代定済（覚庵）も書家として近藤勇や土方歳三を教え，また医家として活動記録「活人録」（天保3～8年）のほか30年間の日記（「筆記」天保3年6月1日～12月30日，「覚庵日記」万延元年・文久元年の2冊，「癸亥日記」文久3年，「楽水軒起居録」元治元年1月以降，2月11日に逝去のため，後半は別人による）を残している．そうした資料によると，覚庵は19歳で江戸・麹町の医家・安富文行のもとに住み込みで医術の修行に励んだようだ．覚庵はのちに蘭方も取り入れ，また西洋医学の書籍も収集している．師の安富文行がどのような医者であったのか，明確に示す資料を見出だし得ないが，麹町に棲んでいたという安富奇碩の子孫かもしれない．安富奇碩については，杉田玄白が『蘭学事始』で次のように述べている．

> 山形候の医師で麹町に住み，かつて長崎に遊学し，オランダ語25字を習い，その文字でイロハ四十七文字をしたためて持ち帰り，外国の書も読めると吹聴し，中川順庵らもそのもとで初めてオランダ文字を習っていた，と．

覚庵は安富文行のところで，産科を中心に学んだらしく，安富家での修行中に江戸市中各所のお産に立ち会っている．谷保に戻ってのちは，外科・内科・眼科にも携わり，弟子と共に近隣はもとより国分寺・府中・立川・日野まで往診している．覚庵直筆の「漢方調合処方書」「覚庵分量考」「覚庵抄録」などの記録からは，当時の薬の調合の様子も垣間見ることができる．さらに「黒龍散」という婦人薬をはじめ半夏厚朴湯や葛根湯などを製造販売しており，その製造には淀橋のいわしや由兵衛が本田家に滞留して関わっていたことも文書から知られる．

明治以降の本田家は戸長としての仕事に追われ，本家は村政を中心とし，医業は分家にゆだね今日に至っている．